

## はじめに

私たちが第二言語習得の共同研究をはじめから二十年近くが経ちました。これまでの研究成果は国内外の学会で発表した上で、論文にして出版してきました。本書はそれらを加筆・修正し、新たな研究内容を加えて、1冊の本にまとめた概説書です。資料の分析がすべて終了したわけではありませんが、ここまでの私たちの研究活動と成果を一区切りとして整理し、本書として出版することにしました。

本書で紹介している研究は日本に住む日本語母語話者による英語習得と北米で学ぶ英語母語話者による日本語習得に関する資料に基づきますが、課題によっては第三言語として日本語を学習する大学生からの資料も取り扱っています。本書の特色は2つあります。第一の特色は一般的に文法領域として分類されている形態・統語・意味・音声から、コミュニケーションの接点で重要な機能を果たす語用・談話構造・応答ストラテジーまで、幅広い領域に渡って第二言語習得のテーマや現象を取り扱っていることです。第二の特色は、第二習得習得について単に基本的な観察をするだけでなく、「なぜ第二言語習得ではこのような問題に直面するのか」あるいは「どのように第二言語習得では知識を獲得するのか」を明らかにするために、実証的な調査結果について理論的な説明を加えていることです。

本書では、日英語の第二言語習得研究の分野において重要な関心をもって議論されてきた主要なトピックを集約して取り上げました。特にこの一冊で目指した点は、パラミター値再設定仮説から意味素性マッピング仮説への理論的変遷の中で第二言語習得研究が経験した大きな流れを把握しつつ、これまでの実践調査の中で何が明らかになり、何が未解決の問題として残されているかについて理解できるよう、すなわち日英語の第二言語習得研究に関する今日の全体像の把握にあります。わかりやすく、ていねいに解説しましたので、大学や大学院で英語や日本語の第二言語習得を学ぶ学生・大学院生・若手研究者の方がたに読んでいただければと思います。

本書で取り上げた研究は、多くの人たちと共同研究プロジェクトを実施している過程で獲得し深めた知見に基づくもので、研究仲間である狩野暁洋

先生、Bariş Kahraman (バリス・カフラマン) 氏、川崎玲央先生、Seth Goss (セス・ゴス) 先生、近藤隆子先生、澤崎宏一先生、白畑知彦先生、清水敬也先生、須田孝司先生、武田修一先生、寺尾康先生、土屋伸介先生、Carlos Pimentel (カルロス・ピメンテル) 先生、藤森敦之先生、Sungshim Hong (洪誠心) 先生、増本朱華氏、山根典子先生、Zhiguo Xie (解志国) 先生にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。皆様のご協力やご支援なしでは、このように多岐にわたるテーマや課題について研究することはできませんでした。また、学会発表において貴重なコメントをいただいた稲垣俊史先生、大津由紀雄先生、影山太郎先生、白井恭弘先生、三原健一先生、平川眞規子先生、Hun-tak Thomas Lee (李行徳) 先生、John Matthews 先生、若林茂則先生、遊佐典昭先生に感謝申し上げます。そして、ここで紹介した実験には多くの日本の高校生と大学生、そして北米の大学生が被験者として参加してくれました。彼らの協力がなければ、プロジェクトは実施することができませんでした。感謝したいと思います。最後に、草稿に目を通していただいた遊佐麻友子さん、どうもありがとうございました。

本書で紹介した私たちの研究は、科学研究費補助金 (C17520387・C20520551・B23320116・C26370700・B26284077)、静岡県立大学グローバル COE、静岡県立大学教員特別研究費、オハイオ州立大学人文科学部・東アジア言語文学科・日本学研究所より長年にわたってご支援を受けたりサーチプロジェクトに基づくものです。ここに記して感謝申し上げます。

くろしお出版の池上達昭氏には、本書の企画段階からたいへんお世話になりました。私たちの筆がなかなか予定通りに進まず、出版が今日になってしまいました。いつも変わらない励ましをいただき、ありがとうございました。こころから感謝申し上げます。

最後になりましたが、本書は家族の理解なしでは完成に至りませんでした。吉村順、中山ジェニファー、聖莉乃に「ありがとう」と言います。本書はこれらの研究を行なっている間に他界した私たちのそれぞれの母親に捧げたいと思います。

静岡とコロンバスにて 2018 年春

吉村紀子・中山峰治

## 第二言語習得研究への誘い—理論から実証へ

## 目 次

はじめに	iii
第1章 第二言語習得研究—課題と理論	1
1. 本書の目標	1
2. 臨界期と外国語習得	2
3. インターフェイス理論	3
4. 本書の構成	5
第2章 形態素—2種類の-s	7
1. はじめに	7
2. 英語の形態素—2種類の-s	8
3. 3人称単数-s	9
4. 名詞複数形-s	15
5. なぜ-sは欠落するのか	20
6. まとめ	25
第3章 WH-移動	27
1. はじめに	27
2. 理論的背景—WH-移動とスクランプリング	28
3. 先行研究—前置詞残留と随伴	32
4. 長距離 WH-移動習得の問題点	38
5. まとめ	43
第4章 再帰代名詞の解釈	47
1. はじめに	47
2. 束縛理論—C-統御と統率範疇	48

3. 先行研究—himself	52
4. 先行研究—「自分」	60
5. 不定詞節の主語—PRO	70
6. 今後の課題—PRO主語欠如仮説	78
第5章 束縛変項解釈	81
1. はじめに	81
2. 束縛変項と弱交差現象	82
3. 英語母語話者による束縛変項解釈	87
4. pro脱落言語の母語話者による束縛変項解釈	92
5. 日本人英語学習者の束縛変項解釈	98
6. まとめ—「彼」と he	102
第6章 コントロール・タフ・主語繰り上げ構文	105
1. はじめに	105
2. 構文の統語特徴と母語習得	107
3. 第二言語習得研究の成果—主語と介在効果	116
4. 考察—seem 構文のむずかしさ	122
5. 今後の課題—経験者句の指示性	126
第7章 テンス・アスペクト	131
1. はじめに	131
2. 日本語と英語のアスペクト	133
3. 日本人英語学習者による過去・現在完了の用法	137
4. なぜ母語転移の克服はむずかしいか	142
5. 素性組立仮説に基づく分析	146
6. 日本語学習者による「た」・「ている」の習得	154
7. まとめ—明示的指導に向けて	162

第8章 談話構造における(代)名詞の用法 .....	165
1. はじめに	165
2. 顕在代名詞と非顕在代名詞	165
3. 母語話者の代名詞用法—子どもと大人	167
4. 第二言語習得者の(代)名詞用法	171
5. 考察—母語と外国語の転移	180
第9章 プロソディーポーズ・フォーカス語句・ピッチ幅 .....	183
1. はじめに	183
2. モーラとシラブル	184
3. 韻律境界・ポーズの習得—右枝分かれ・左枝分かれ	185
4. フォーカスプロソディの習得—核強勢・ピッチ・プロミネンス	189
5. 先端研究の成果と今後の課題	200
6. まとめ—母語転移の3ステップ	207
第10章 応答ストラテジー .....	209
1. はじめに	209
2. 応答ストラテジーのタイプと特徴	210
3. 先行研究—イタリア語・フランス語	215
4. 日本人英語学習者の応答ストラテジー	216
5. 日本語学習者の応答ストラテジー	219
おわりに—今後の展望 .....	223
参照文献 .....	225
索引 .....	242

# 第1章

## 第二言語習得研究

### —課題と理論

#### 1. 本書の目標

2020年に英語が教科として小学校に導入されることになりました。義務教育におけるこの新たな取り組みによって、日本の英語教育はこれまでの6年間から8年間と長くなり、学習内容が量的に増大し質的に多様になることが予想されます。これらの変革を成功に導くためには、基本的なコミュニケーションに必要な構文や単語を学年ごとに適切に配置し、授業内容が段階的に、ステップバイステップで学習できるように綿密な指導体制の充実が必要となるでしょう。

幸いなことに、これまでの外国語習得研究の成果に加えて、近年では言語習得の分野に新しい実験方法や調査機器が導入されたことで、学習者にとって何が習得しやすく、何がむずかしいか、あるいはなぜ特定の学習項目が習得に時間がかかるかなどについて、いろいろと新たなことがわかるようになりました。したがって、これからの日本の英語教育では、これらの新しい発見を十分に踏まえた上で、実証的な研究データをさらに分析しつつ、理論的に裏打ちされたカリキュラムや指導方針を展開していくことが重要となります。

本書では、その期待に答えるべく、私たちがこれまで収集したデータやその分析結果を紹介しながら、母語習得と外国語習得の交差する課題について

## 第2章

# 形態素

## —2種類の-s

### 1. はじめに

言語習得についてよく知られている仮説に「臨界期説」(critical period hypothesis)があります。Lennebergが1967年に言語習得能力について提唱した仮説で、人間には生物的認知能力の発達との関係で、言語習得に年齢的な限界、つまり「臨界期」が存在するという考え方です。もう少し具体的に説明すると、「臨界期」は思春期(puberty)までを意味し、臨界期以前に言語を学習し始めた場合、あまり苦勞せずにその言語を習得できるのに対して、臨界期以後に言語学習を始めた場合、言語習得は困難なものとなり、完全な習得に至らないという主張です。この臨界期説はもともと母語を習得する上での年齢制限として提唱されたものでしたが、第二言語習得においても適用されると考える研究も多くなりました。

その発端となった研究はJohnson & Newport(1989)で、彼らはアメリカに平均して10年間住んでいた中国語および韓国語の母語話者46人の英語習得(たとえば、WH疑問文、過去形、3人称単数の形態素など)について調査しました。その結果、米国に移住してきた年齢(age of arrival)が7歳までの被験者グループはネイティブレベルの英語力を習得できたのに対して、アメリカ入国年齢が7歳~15歳までの被験者グループは正答率が年齢に反比例して低下し、ネイティブレベルの習熟度までに至らなかったと報告して

## 第3章

# WH-移動

### 1. はじめに

言語は、私たちがコミュニケーションの意図や目的に沿って用いることができるように、多様な構文を生成する能力があると考えられています。しかしながら、実際に現れる言語形式や操作は言語間で異なることが可能で、その結果、個別言語にはそれぞれ特有の特徴が存在します。本章では、英語のそのような特徴の一つである WH-移動について日本人英語学習者が習得する過程をわかりやすく説明します<sup>1</sup>。

まず、簡単な疑問詞疑問文の日英語比較から始めましょう。

- (1) a. John bought a new cellphone yesterday.  
 b. \*Did John buy what yesterday?  
 c. What did John buy yesterday?
- (2) a. ジョンが昨日新しいスマホを買った。  
 b. ジョンが昨日何を買ったの。  
 c. 何をジョンが昨日買ったの。

---

1 別段の記載がない限り、ここでの WH-移動は顕在 (overt) の操作を意味します。



## 第4章

# 再帰代名詞の解釈

### 1. はじめに

第二言語習得研究の領域で早期に取り上げられた研究テーマの一つに再帰代名詞の束縛 (reflexive binding) があります。この研究は1960年代からの生成文法 (Generative Grammar) の進展の中で Chomsky (1981) が提案した「原理とパラミター」(Principles and Parameters) の理論に基づき行なわれるようになった調査で、第二言語学習者がパラミターの値を母語から第二言語へと適切に再設定 (parameter resetting) できるかどうかを考察の焦点でした。このパラミター値再設定仮説の背景には、2つのパラミター値が異なる時、第二言語学習者は母語の干渉によって再設定に問題が生じて習得が困難となる、あるいは遅れるという前提がありました (Flynn 1987; White 1989, 1990, 2003)。この前提に基づき着目されたのが英語の再帰代名詞の習得でした。

本章では、日本語と英語の間に再帰代名詞あるいは人称代名詞とその先行詞<sup>1</sup>との照応関係に齟齬がある点を概観した上で、これまでの先行研究の成果を歴史的に遡りつつ、パラミター値再設定仮説が第二言語習得の本質をどこまで明らかにできたかを説明したいと思います。そして、パラミター値再

---

1 別段に区別して記載しない限り、総称して「代名詞」とします。

## 第5章

# 束縛変項解釈

### 1. はじめに

第4章では、日本人英語学習者による英語の再帰代名詞 himself と日本語非母語話者による日本語の再帰代名詞「自分」の束縛解釈の習得について説明し、これまでに明らかになったことを「原理とパラ미터」による初期の研究からミニマリスト・プログラムによる最近の研究まで概観しました。その結果、時制節における束縛解釈は比較的容易であるのに対して、不定詞節における束縛解釈はむずかしいことがわかりました。この容易さは私たちが生得的に持つ「局所性」が原動力となっていると推測する一方、このむずかしさは統率範疇パラ미터の再設定というよりむしろ不定詞節の構造の理解が不十分なために生じるのではないかという結論に至りました。

本章では、この課題をさらに掘り下げて、外国語を学ぶ私たちにとって「局所性」と「パラ미터」の持つ意味を再考したいと思います。特に、代名詞の束縛変項解釈について説明します。前章で説明した再帰代名詞の束縛解釈は先行詞が固有名詞あるいは普通名詞で指示的な読み (referential reading) でしたが、ここで取り上げる束縛変項解釈は先行詞が一般的に「数量詞」(quantifier) と呼ばれる単語や句 (数詞 one, two, three、不定数量詞 each, every, many) および非指示的な (nonreferential) WH- 疑問詞になります。たとえば、次のような例を取り上げます。

## 第6章

# コントロール・タフ・ 主語繰り上げ構文

### 1. はじめに

本章では、次のような3つの構文について考察します。

- (1) a. John promised to study hard.
- b. John is tough to please.
- c. John seems to be friendly.

(1)の文はそれぞれ複雑な構造を持つ文で、一般的に(1a)がコントロール構文、(1b)がタフ構文、(1c)が主語繰り上げ構文と呼ばれています。3つの構文に共通する特徴は3つあります。第一に、埋め込みの補文節が不定詞、第二に、その不定詞の主語が無形で見えない・発音されない文法項(主語あるいは目的語)、そして第三に、その不定詞節内の空項(null argument)と先行詞の照応関係が長距離であることです。それでは、その3つの特徴を簡単に見ておきましょう。

まず、これらの構文は補文節が不定詞となる構造を持ちます。

- (2) a. John<sub>i</sub> promised [PRO<sub>i</sub> to study hard].
- b. John<sub>i</sub> is tough [PRO to please t<sub>i</sub>].

## 第7章

# テンス・アスペクト

### 1. はじめに

日本人英語学習者にとって英語のテンスとアスペクトは一見それほどむずかしいようには思えないのですが、実証研究を進めていくと、かなりやっかいな問題であることがわかります。その大きな要因の一つに、個別の言語内で形式 (form) と意味 (meaning) が必ずしも 1 対 1 でないことが挙げられます。たとえば、テンスの例を考えてみますと、過去を表わす形式は一般的に「た」あるいは -ed ですが、その意味は必ずしも過去の出来事のみを表わすとは限りません。

- (1) a. 健太は空港に着いた。
- b. The cow jumped over the moon.

(1a) では、形式が過去形の「着いた」となっていますが、過去の時間が明記されていないため、発話時に出来事（「空港に着く」）が完結したことを表わすことができます (Nakau 1976, 寺村 1978, 荻原 2016)。同様に、(1b) では、動詞が jumped と過去形ですが、出来事 (jumping over the moon) が完了したことを意味することができます。

またアスペクトの例では、進行相の形式「ている」あるいは -ing は動詞

## 第8章

# 談話構造における（代）名詞の用法

### 1. はじめに

本章では、談話構造における（代）名詞の表現と用法について考えます。特に、第二言語として英語や日本語を学ぶ学習者がストーリーテリングにおいて名詞や代名詞をどのように用いるのかに焦点を置いて考察します。

具体的には、代名詞に関する日本語と英語の相違点を簡単に説明した上で、日本語と英語の母語話者がストーリーテリングにおいて名詞や代名詞を照応表現としてどのように用いるかを見ます。続いて、日本人英語学習者の産出した資料と英語を母語とする日本語学習者の産出した資料を比較対照し、第二言語学習者の（代）名詞用法の特徴を炙り出します。

### 2. 顕在代名詞と非顕在代名詞

談話に現れる代名詞について、日本語と英語の間には重要な違いがあります。その特徴を簡単に概観しておきましょう。まず、日本語には英語の顕在代名詞のような文法項目は存在せず、「自分」がその役割を担うと考えられています (Kuroda 1965, 久野 1973, 柴谷 1978, 井上 1987)。たとえば、次のような代表的な例文を考えてみます。

## 第9章

# プロソディ

## —ポーズ・フォーカス語句・ピッチ幅

### 1. はじめに

外国語の学習者にとって発音がむずかしいことはよく知られています。日本人英語学習者にとって日本語にない英語の子音 ([f], [v], [θ], [ð]) などは識別することも産出することもむずかしく、日本語の摩擦音「フ」や「ブ」・「ス」・「ズ」と置き換えてしまいます。また、[r] と [l] や [z] と [dz] などをうまく区別できずに発音してしまったり、[i] と [y] や [n] と [ŋ] の違いがよく聞こえなかったりします。逆に、英語を母語とする日本語の学習者は [tu] と [tʰu] を間違えたり、[Φu] が発音できなかったり、短母音と長母音を聞いて区別できなかったりします。たとえば、フーリン（風鈴）と言いたいのになに フリン（不倫）と発音してしまったり、シュジン（主人）とすべきだったのに シュージン（囚人）と言ってしまったとか、発音上の失敗をいろいろと耳にします。

最近では、このような個々の発音の問題に加えて、イントネーションや音調、音の高低や強弱、そしてポーズといった句レベルや文レベルでのプロソディと区切りに関する問題も着目されるようになりました。特に、グローバル化に伴ってオーラルコミュニケーションの機会が急増しているため、新しい外国語指導の実践では音読の重要性が強調されています。中学校の教科書を見てみると、前の単語の子音とそれに続く単語の母音を繋げて読み取

## 第10章

# 応答ストラテジー

### 1. はじめに

談話の形式には、第8章で考察したストーリーテリングに加えて、ダイアログ（対話）があります。本章では、ダイアログでの質問に対する「答え方の方策」、すなわち応答ストラテジーの第二言語習得研究についてこれまでの調査でわかったことを概観し、今後の研究の方向性について考えます。

言語コミュニケーションの目的は、「話し手は求められている情報を提供し、聞き手は必要な情報を得る」といった情報の授受で、キャッチボールのようなものです。このコミュニケーションの目的を効率よく達成するためには、相手の意図を適切に理解した上で的確に応答する必要があります。この応答の手立てがストラテジーです。応答ストラテジーでは提供されるべき情報を効率よく、端的に、そして間違いなく伝達することが期待されます。このことを第二言語習得の観点から見ると、情報の提示方法が母語と外国語の間で一致すれば問題は生じないのですが、異なった場合、その習得は学習者にとってむずかしい問題となります。この視点から、英語と日本語の応答ストラテジーの第二言語習得研究の成果を眺めてみましょう。

本章の構成は、次のようになります。まず、応答ストラテジーとはどのような方策で、どのような言語形式で具現化されるかを典型的に観察します。次に、英語と日本語の応答ストラテジーについて概観し、両言語間の相違点